

一 本研究の目的

日本の国語教育の近代化にあたっては、垣内松三の業績が基礎となった。現代の国語教育史研究においても、そうした見方は定説となっている。例えば、倉澤栄吉は次のように述べている。

垣内松三先生は、近代の国語教育の理論と実践の本格的指導者として、最初の学者である。我が国近代の国語教育実践理論は、垣内に始まり西尾実先生へと継がれていく。⁽¹⁾

近代化の過程において、垣内松三の理論的寄与により、教育学の応用部門の位置とは次元の異なる、独自の国語教育文化を構築することに成功した。この点を高橋和夫は次のように述べている。

国語教育史上で垣内松三が活躍した時代は、同時に、太平洋戦争前の国語教育の最も盛んな時代であった。のみならず、彼の学説こそが、国語教育思潮の中核であったと言ふことさえできる。このことは、現在から考えて、ただ単に国語教育がこの時代に最も栄えたというだけの意味で言うるのではなく、国語教育が国語科教育ではなく国語教育であること、つまり国語教育が教育一般から独立した地位を占めていたという、質の問題として捉えられるからである。

垣内松三（かきうち）微カリセバ国語教育は、諸外国と同様、教育一般に従属し、国語教育学は模索もされずして、教育学の中の各科教育法に過ぎず、国語の実践は他教科への技術に終わっていたであろう。ところが垣内松三という個性は、この国語科教育を国語教育という独立した位置に仕立て上げ、教育学の原理とは異った基盤に立つ、国語教育

学を創り上げたのであった。⁽²⁾

垣内松三の学問的貢献は、「教育学の原理とは異った基盤に立つ、国語教育学」の樹立として機能したが、その垣内理論の中心的学説が、「形象理論」であった。

大正期になると、さまざまな「読みの指導理論」が提唱されるようになるが、その後の国語教育界に大きな影響力を残したものとしては、垣内松三の『国語の力』(1922)を挙げなければならない。垣内は文学の「読み」の方法原理を、「文の形は想の形」とみる「形象理論」によって明らかにしようとした。⁽³⁾

文章の形には思想の形が表現されているというのが形象理論だという。しかしこの説明だけではいささか観念的である。このように形象理論そのものは難解であり、当時から今日に至るまで、その意味を明瞭に解説した例は少ない。のみならず、その難解さのために、十分に理解されないままに批判にさらされた。

岩手県女子師範学校附属小学校の教師であった清水清吉という人物が、昭和十一年十月に、『読方教育に於ける新復古主義の提唱』と題された小冊子を著している。「満州国独立を契機として、国際線に見事な跳躍を遂げた祖国の躍進は、東亜の盟主としての充分なる実力を示し、牢固として抜くべからざる多年蓄積の潜勢力は、諸外国の嫉視、猜疑の策動にも拘はらず、世界の隅々迄駈々たる発展力を見せて、其の底止する所を知らません。」⁽⁴⁾という、大日本帝国による大東亜新秩序建設へ向かう時代であった。こうした時代背景は国語教育にも影響を与えていた。国語

(1)

教育は「国心を養ふべき最も現実的な営」^⑤みであるとする。そして、「教師と児童との真剣な実践に、仕切直しや取り直しはありません。／然るに国語教育は余りに概念的なものから出発し過ぎはしないでせうか。徒なる概念的諸学説の送迎にめくるめき、脚下は何時でも浮動してゐたではなかつたでせうか。余りに概念の構築にのみ汲々として、もつと正當に尊重されねばならぬ自己の尊い経験を、軽視してゐたではないでせうか。メフィストの言葉を真似る訳ではありませんが、私達に限する限り、実践こそ『緑なす生活の黄金の木』です。』^⑥と、概念的学説先行・実践等閑視の現状に異議申し立てを行っている。こうした問題意識は清水の教師経験から自然に発見せられたものであった。

教授者は理想のみ徒に高く、理論の堂々めぐりに日も之足らずの有様で、児等は読みの貧困に泣いてゐる現状ではないでせうか。私は岩手の児等を前にして、痛切にそれを感じてゐます。^⑦

清水の言う「理論」に、「形象理論」が含まれていることは次の引用文でも明らかである。

形象理論は現れずとも、芭蕉の名句は、芭蕉以後の人々によつて、其の形象を把握され、解釈学は体系づけられずとも、現代解釈学の教ふる文解釈の方法は、既に既に日々実践せられてゐたのです。^⑧

清水という一実践者の言論からは、理論的学説に対し、嫌悪と憧憬という表裏一体の感情を読み取ることもできる。清水は次のようにも述べている。

私は決して理論を排撃する者ではありません。理論は私達各の一方的な実践方法を統一止揚し、それに哲学的意味を与え、学的組織体系を整へて、私達に誤なき実践の指標を与へて呉れます。私達は実践の背景とし根拠として、勿論之等の学説を研究せねばなりません。^⑨

そして、清水は「私自身、読みの本質は文の形象を読むにありと信じて」^⑩実践を営んでいる。

概念的学説重視の国語教育に対する、清水のこうした批判は、かえつて皮肉にも形象理論の影響力の強さを傍証する史料として読めてしまふ。戦中・戦後の価値激変のなかで伏流しつつも、形象理論はその命脈を保ち、後に冲山光等によって、再評価がなされることになる。

しかし、いつの時代も、形象理論の持つ本質を詳細に考察する試みは（一部の研究を除き）遅々としていた。形象理論の本質の一端を説明することが本稿の目的である。

二 形象理論の輪郭

形象理論を語る際に多く引用されるのは、垣内の次の文言である。

雪片を手にしてその精巧な結晶を見んとする時掌上に在るものは一滴の水である。／水滴を分析して結晶の形象を視んとするがごときは今の言葉の考察の態度である。／言葉の本質を把握せんとせば先づ直下にその微妙なる形象を観なくてはならない。^⑪

文章の一部の語句を取り出して、それを国語学的・言語学的に分析したとしたら、その抽出の段階で文章の生命は失われてしまい、その結果、文章の本質を見ることはできないということをし、極めて象徴的な表現で示唆している。

「形象理論」の概略を知るために、とりあえず垣内学説の基本図書『国語の力』（一九二二）にあたってみることにしよう。『国語の力』では次のように書かれている。

文の解釈の第一着手を、文の形に求むるといふ時、それは文字の連続の形をいふのではなくして、文字の内に潜在する作者の思想の微妙なる結晶の形象を観取することを意味するのである。^⑫

文章の中には作者の思想が潜在している。その思想は「微妙なる結晶の形象」として、読者によって「観取すること」ができるというのである。次のようにも述べている。

文の形を見るといふのは、作者の意識の流動を形に見ることをいふ

のである。⁽¹³⁾
 文章の形はすなわち、作者の意識の流動を形として表出したものであり、その形を見ることでもって、作者の意識に迫ることができる。この点について垣内は換言しつつ強調している。

文の形を見る力は、文中に流動する作者の意識の形を意識する力である⁽¹⁴⁾

文章の形は、とりも直さず、作者の意識の形を表出したものであるという思想が読み取れる。「文の形」を近代言語学で言うならば、「文体」ということになる。文体には作者の思想が顕現しているという意味になり、近代レトリック法に接近した解釈が可能になってくる。

『国語の力』発刊の五年後、垣内松三は論文のなかで次のように述懐している。

心の中に佐藤徳市氏の近業『心と語との融合点に立つ読方教育』を想起した。(中略) 国語教育の研究の上に於ても心と語との融合点から現はれて来なければならぬ遠い前程が開けて来たやうに感ぜられる。⁽¹⁵⁾

佐藤徳市の著書名は、正確には『心と言葉の融合点に立つ読方教育』(一九二七)であった。佐藤は、垣内の形象理論の成果をいち早く消化吸収し、実践に結びつけた。そうした佐藤の業績を垣内は高く評価していたのであった。同論文で垣内は、「心と語との融合点に立たねばならないことは論究されて来た⁽¹⁶⁾」と、繰り返し、心と言葉の「融合点」を強調する。この「融合点」という概念を、垣内松三の高弟、輿水実は「プラス」という言葉でもって次のように解釈している。

形象理論というのはその教材の本質観、教材の生かし方の本質論であった。心プラス言、言プラス心のプラスに注意する、それが形象理論であった。⁽¹⁷⁾

形象は「心プラスことば」あるいは「ことばプラス心」の、そのプラスのところを押えようとしたものである。この形象論は大正一一

年の『国語の力』にあらわれ、…⁽¹⁸⁾

最近約三〇年間の国語科教育をめぐる公的言説では、国語科は言語の教育という立場を明確にせよとの方向付けがなされている。しかし、本質的に、国語教育は狭義の言語教育へと落とし込むことはできない。垣内や輿水の指摘からも分かるように、国語教育は、言葉に寄り添いつつ、そこに必ず「心」が随伴してくるものだからである。

三 心と言葉とのひずみ

一九二八(昭和三)年に、垣内松三は「形象の概念」という論文を発表している。「心と言葉との融合」という観点から、垣内の論を整理していく。

心と言葉との融合の現象を、読者が見る時に如何に見るかといふ問題が、所謂読方教授の問題になるのであつて、此の研究を基礎にして、それを分析して言葉の方面から入つて行く心の読方、心から出発して、言葉を吟味する読方が、如何にして学理的に基礎付けられるかといふ問題が、シムボルシチエーションといふ問題として、攻究されて居るのである。⁽¹⁹⁾

言葉から入って心を読む、また、心から出発して言葉を吟味する、という姿勢が貫かれている。こうした行為は、学理的には「シムボルシチエーション」という問題として攻究することができるというのである。では、ここでいう「シムボルシチエーション」とはどういうことか。垣内は次のように言う。

シムボルシチエーションといふのは、心と言葉とがどういふひずみになつて居るかといふ事である。茶室の違棚に物を並べる時に、並行線上にきちんと並べるのは、味ある形象を作らない。それぞれの間、どれ程かの角度を持つ様に並べる。かういふ表現層のもつひずみによつて、形象は味を持ち展開の完成をする。これは庭の飛び石の並べ方でも、樹の植ゑ方でも、つくばるの石の据ゑ方でも同

じである。(中略) 芸術其の外全般の社会現象に亘つて、此のひずみの保たれない時ほど不調和な事はない。(中略) 人の人との交渉でも、皆ひずみを感じる事に於て仕合せだと考へて居る。／言語の現象では、心と言葉とのひずみを、明瞭に取るのが、創作としては立派な芸術品であるし、読方としては此の上もない読方である。⁽²¹⁾

心と言葉の間にひずみがあるほうこそ、芸術作品として優れているといふのである。この「心と言葉とのひずみ」という発想が、形象理論を解釈する重要なキーワードになる。垣内の言う「心と言葉とのひずみ」とはいかなるものか。

言葉と心とのひずみを考へることは、形象の問題では重要になつて来る。これを先づ写照の点から見れば、写照をするのは、ある一人の個人である。随つてある一人の個人が個人としての立場から、写照するのであるから、その寧ろは個人的である。特殊である。したがつてその表現層は特殊である。然るにその表現面は実相に観入したものであるから、実相は普遍的であり、随つて表現面は普遍的である。故に表現層を個人的特殊的、即ち個性的にする程、表現面は普遍的になる。ここに芸術の個性が普遍的であるといふ、秘密が存するのである。かういふ個性即普遍といふのが、写照上のひずみである。⁽²²⁾

ひずみは写照であり、実相観入である。⁽²³⁾

このように同論文では「実相観入」へと論点を転換してしまふ。「実相観入」とは、斉藤茂吉の歌論における概念である。しかし、本稿では「実相観入」のほうにはあえて論を進めない。形象理論をより良く理解する切込み口が他にあるからである。それを次章では取り上げる。

四 富士谷御杖の倒語説

垣内松三は、一九四〇(昭和十五)年に、自らのこれまでの学的展開を回顧した著作を発表している。その中には次のような記述がある。

「形象」及び「形象理論」は何等外国の学説の翻訳でも、紹介でもなく、またその名儀は決して伝統を無視して作ったのでもなく、少くとも我が国に於て伝統的に極めて少数の人々の間に持続せられた考へであつた。とにかく、形象理論は歴史的にすでに先哲の求めたものを、現代の精神科学によつて明確にせんと欲したもので、少しも突飛な学説でもなく、また何等か新奇を銜ふやうなものでもない。⁽²⁴⁾

形象理論は、日本における伝統的な学理から発展したものであり、それは「歴史的にすでに先哲の求めたもの」だったといふのである。ここでいう「先哲」とは、具体的には本居宣長と富士谷御杖を指す。本稿では、このうち特に富士谷御杖に絞つて、その学問的受容を検討していく。富士谷御杖の学説は現象学的研究に先だつこと一世紀以前にある。この素朴な学説が、これまで充分に発展せしめられなかつたために、われわれの学問の領域に於て混乱を生じて居るのである。これを整理することが、先づ形象理論の最初の課題であると考へた。⁽²⁵⁾

このように垣内松三自身、富士谷学説と形象理論との近似性を認めている。

富士谷学説における倒語説・真言弁・言霊説等が見直されなければならぬのである。⁽²⁶⁾

富士谷御杖の倒語説・真言弁・言霊説は密接に関連する学説であるが、本稿では、このうち、特に倒語説に焦点を当てて論じていくこととする。

富士谷学説は今日でも半嘲笑的に取扱つてあるが、それは現代の要求から見て、倒語説とか真言弁とか言霊説などとは無縁であるからであらう。全く縁のないやうに見えるかも知れない、さうした素朴な考へ方の中に、真实性を求める重要な問題が、問題的に潜んで居ることが認められないのは遺憾である。⁽²⁷⁾

垣内は、富士谷学説が「今日(引用者注 一九四〇(昭和十五)年頃)でも半嘲笑的に取扱」われていると嘆いている。しかし、これは垣内独

特の僻心からの表現であろう。一九三六（昭和十一）年から一九四〇（昭和十五）年にかけて国民精神文化研究所から『富士谷御杖集』全五巻が刊行されている。むしろ富士谷御杖が発見され認知されてきた時期と言える。

富士谷御杖は、江戸時代後期の国学者である。御杖の学説について鈴木木暎一が次のように簡潔に紹介している。

御杖の説によれば、人間は所思所欲をそのまま言行に表現すれば必ず時宜を破り禍を招く。したがってそれを回避するため所思所欲は言外に言霊（ことだま）として宿らせ、詞は倒語して心中思っていることは別方向にそらして表現するものが和歌である、という。²⁷以下では、この富士谷御杖の唱えた「倒語」説について考察していく。富士谷御杖は一八一七（文化十四）年筆「歌道拳要」の中で次のように記している。

此倒語といふ事。倒とは、たとは、ゆくをゆかすといひ、見るをみすとはいふ、是也。されとこれらは事のうへ也。情のうへにも倒あり。思ふ所をいはずして、おもはぬ所に詞をつくる、是也。²⁸

「事」と「情」のそれぞれに倒語がある。倒語とは、思っていることそのものを言わないで、あえて思っていることとは違う方向に表現する技法である。「行く」ことを述べるのには、「行かない（ならば）」と表現する。「見る」と言いたいところを、「見ない（ならば）」と展開するとうようにである。御杖はさらに続ける。

倒語に二様あり。一は比喻なり。比喻はたとへは花の散をもて無常を思はせ、松のときはなるをいひて人のことふき「寿」をさとせる、

これ也。二には比喻にはあらずして、外へそらすこれ也。たとへ、妹をみまほしといふを妹か家を見まほしとよみ、人の贈りものを謝するに其物の無類なるよしをよむ類也。²⁹

現代でも「高砂」を結婚披露宴で謡う。相生の松に寄せて夫婦愛と長寿を願うのである。また、恋人に逢いたいとの意味を、恋人の家を見た

いという表現に含ませる。贈り物に対して「ありがたい」などとは言わずに、その贈答品がいかに珍しい物であるかを語るほうが、謝意が通じる。

御杖の言うこの二様の倒語について、哲学者、中村雄二郎は次のように解釈する。

この二つは、それぞれ、最近ヨーロッパの言語学で重要視されるようになった「隠喩」（メタファー）と「換喩」（メトニミー）にほかならないと言っているのではなからうか。³⁰

富士谷御杖の言う「比喻」とは、今日で言う比喻のうちの「隠喩」に相当し、「外へそらす」ほうは、今日の修辞学で言う「換喩」に相当するといっているのである。坂部恵や佐藤深雪といった美学者も中村の解釈を支持する。³¹

この二つの比喻表現に関して、富士谷御杖は次のように論じる。

この二様のうち、比喻はよみやすく、そらすはよみかたき物也。此故にそらすかたを倒語の到りとはすへき也。³²

隠喩と換喩のうち、倒語の機能が遺憾なく発揮されるのは換喩のほうだと言っているのである。佐藤深雪も同様の判断を示す。

倒語の本意は、比喻の倒語よりもそらす倒語にあるという点に注目したい。メタファーとメトニミーは対等な修辞ではなく、後者に倒語の本質があるというのである。³³

換喩とは二つの事物の隣接性に基づくレトリックである。この「隣接性」は空間的なものに限定すべきではなく、時間的なもの（継起性）も観念的なもの（百科辞典的知識）も含んでいる。（中略）換喩は言語世界だけでなく現実世界をもすっぽりと包み込む。³⁴のである。ここからも、国語教育を言語の教育だと限定するのには無理があることが分かる。換喩というレトリックが橋渡しとなって、精神世界全体の中に飛び込んでいくことになる。右引用文では「現実世界」と書かれているが、むしろさらに、それを認識する精神世界をすっぽりと射程に収めていると理解

した方が良いであろう。

高等学校教科書にも掲載され、最も親しまれている換喩例を取り上げよう。芥川龍之介「羅生門」の冒頭である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。朱雀大路にある羅生門の近辺は普段人通りが多い。よって、「この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。」^{③④}ここで「市女笠」と言っているのは、それを身に付けている女性を指す換喩表現であり、「揉烏帽子」と言っているのは、それをかぶっている男性を指す換喩表現である。

これは単語レベルの換喩の例だが、単語レベルにとどまらず、句や文のレベルでも換喩は機能する。そして、この句や文のレベルの換喩が読み取れるということが、まさに学校国語における読解力を構成する基本的能力となる。特に文学教材の読解力とは、かなりの部分、この換喩によって喚起される〈心〉を読み取れる能力に関わってくる。

換喩は句や文に限らず、さらには文章全体や文学作品全体においても機能する。換喩的テキストとして文学を捉えようとする換喩文学論が、比較文学者、諸坂成利によって構築されつつある^{③⑤}。「部分が全体を飲み込む《換喩》的テキスト」^{③⑥}の主張は、言語表現行為の本質を突く論究になっている。

倒語説に拠る解釈の例を見てみよう。万葉集の高市連黒人の歌「いづくにか 舟泊てすらむ 安礼の崎 漕ぎたみ行きし 棚なし小舟」について富士谷御杖は以下のように解釈している。この歌は言葉の上では、特別の理由もないつまらないことを言っているようだが、必ず表面上の言葉とは別の情があることは明らかである。そう考えると、漕ぎ巡って行った棚無し小舟には、その船中に必ず旅人が乗っていて、見たこともない磯のある山のかげなどに停泊して、心細くしょげており、どんなにか故郷を恋い慕って嘆いているだろう。同情に堪えない。自分の郷思を素直に述べたいのだが、従駕に遠慮して、このように船中の旅人の郷思

を想像して詠った歌であることは明らかである。公事と私事の両方の性質を帯びていて、表に述べられているところは、ただ、この舟の停泊した処を推察するより他はない表現で、それはそれで見事ではあるが、それだけでは不徹底である。胸中余りあるばかりの郷思について、このように慎み深くも極限に至った表現は、そのつらさが深く思いやられて、あわれということ際限ない。これはひとえに、倒語の巧妙なはたらきに拠るものである。^{③⑦}

富士谷御杖のこの倒語説に拠る解釈について、島木赤彦は、次のように批評している。

御杖の所謂倒語の説は、これを万葉集の各の歌に当て箝むるに至つて、理解必しも至れりといふべからざるも、当れるものは比譬心理以上に出て、往々高き意味の象徴に合し、然らざるものは、上方風の偏りを帯びて、多く付会に墮ちる。これが燈の特徴の一であつて、かの高市連黒人の歌

何所にか船はてすらむ安礼乃崎携ぎたみ行きし棚無し小舟

を以つて、旅情郷思堪へがたき心より生れ出でたりとなせる如きは、倒語説の愷切に入つた一例とすべきであらう。^{③⑧}

一部の歌にはあれ、倒語説に拠ること、「高き意味の象徴に合し」た解釈が可能となる。この高市連黒人の歌などは、「倒語説の愷切に入つた一例」だと高く評価している。

五 形象理論に基づいた指導の実際——佐藤徳市の授業

では、形象理論に基づいた授業の実際はどのようなものだったのであろうか。

形象理論を教育実践に応用し、広く読まれた図書として、佐藤徳市著『形象の読み方教育』（一九三二）がある。同書中に、『尋常小学国語読本 卷十』の第二十六課「進水式」の授業記録が掲載されている。授業者は佐藤徳市自身である。公衆の観覧のなか戦艦陸奥の進水式が盛大に執り

行われている風景が描かれた教材である。ある教師用指導書には、同課の「内容観」が次のように述べられている。

我が海軍の最大偉力陸奥の進水式に於ける次第を述べ、且つその海に浮ぶ刹那の壮快な光景を知らしめると共に、帝国の安全を保証する大戦艦の誕生する事は国家国民の共に祝福すべき一事であること銘せしめようとするのである。⁽⁴⁰⁾

佐藤は同教材を自由読させたあと、児童に読後の感想を語り合わせた。垣内の言う「文意の直観」を披露させたのである。児童は、「何となくおごそかな気がした。」「何となく勇ましい気がした。」「何となく心持のひきしまるのをおぼえた」との感想を述べる。それを受けて、「私(引用者注、佐藤徳市)はそれ等の印象をまとめて緊張の感であるとした。」⁽⁴¹⁾

ここで注目しなければならないのは、この読みの授業で収束させていく主想である。「緊張の感」は、作者によって提示されたものというよりも、授業者である佐藤徳市によって設定されたものだという点である。文章の形から作者の思想を読み取らせるはずの形象理論であるが、実際の教育実践的運用にあつては、作者の思想ではなく教師(授業者)が想定した思想を読み取らせるものになっていた。

では本稿で見出した換喩についてはどのように活用されていたであろうか。佐藤徳市は次のように授業を展開している。

更に何が我々に緊張の感をもたらしたかといつて、その吟味に入つた。その時あげられたものは、

イ 軍艦の壮大

ロ 進水式に対する観衆の期待

ハ 式そのものゝおごそかさ⁽⁴²⁾

つまり軍艦の壮大さの表現が、換喩によって緊張の感を喚起している。その他「観衆の期待」や「式そのものゝおごそかさ」といったこれらすべてが換喩によって緊張の感を喚起している。

形象理論に基づき読み方の授業において、文章表現からの換喩によつ

て思想が喚起されていることが、この実践記録からも分かるのである。

六 課題——まとめにかえて——

ところで、垣内松三は次のようにも述べて釘を刺している。

なほ、富士谷学説の一切が、直ちに形象理論の所説でもなく、又現代の言語哲学の主潮として考へられる方向が形象理論の依拠であるでもない。⁽⁴³⁾

富士谷御杖の倒語説だけでは形象理論は説明できないということを、垣内松三自身が語っている。まさしくその通りであろう。しかしこのように語ること自体、垣内松三が形象理論と倒語説の親和性を意識している証である。学理的にも倒語説が形象理論を構成する中核的な学説であることは、本稿である程度明らかにできたと思う。

美学者、尼ヶ崎彬は倒語説について次のように指摘する。

何・を・ど・の・よ・う・に・倒・語・す・る・の・か。何を倒語するかには二種ある。「事」と「情」である。例えば「行く」という「事」を語るのに「ゆかずは」(行かなければ)と逆の「事」を挙げてみる。これは「事」の倒語である。しかしより重要なのは「情」の倒語である。「わが情」の「思はぬ所」を語って、しかもその情を相手に伝えようというのが、倒語の元来の意義なのであるから。(中略)御杖の関心は、情の喚起にある。⁽⁴⁴⁾

富士谷御杖の関心は、情の喚起にあるという。そのことの実例を示す。富士谷御杖の著作に『百人一首燈』がある。百人一首の注釈書である。

その中から、山部赤人の「たごのうらにうちいでゝみればましろにぞふじのたかねに雪のふりける」を取り上げてみる。

富士谷御杖は以下のように解釈する。この浦に来てみると、今は冬でもないのに、富士山の峰に雪がたいへん深く降り積もっている。それを見て、あまりにだしぬけの不意打ちであったので詠んだ。その時、そのだしぬけのさまで、「一向なる」(ひたすらに執着心が激しく抑えられな

い状態)に従っていたならば、かならずたいそう不審に思われるだろう。そのように不審な状態では、平常心を失ってしまう。ひょっとすると、心がうつろになってしまいかねない。それを防ぐために、こうやってこの歌を詠んで、だしぬけの不意打ちに執着し乱れている心を沈静化する。そうしてはじめて、あまり不審にも思われなくて済ませられるのだ。⁽⁴⁵⁾

こうした調子で、御杖は百人一首の大部分の歌について、すべて「一向心」でもって解釈していく。それはあたかも「一向心」の一覧表・目録を示しているかのようにも見えてしまう。

この『百人一首燈』は、これまで多くの歌学者・百人一首研究者から異端の説とされてきた。しかし、精神科学の立場から見ると、日本人の持つ一向心の抽出という点において、たいへん興味深い。

富士谷御杖は自らの歌道を次のように論じている。

歌道いかにこゝろうべきと御たづねうけ給り候。もと哥は、時宜やぶるべからず、ひたぶる心おさふべからぬ時によみて、ひたぶる心・時宜ふたつながら全うする道にて候。おほよそ人、所思のまゝを為にいだす時は(割注省略)かならず宜しきにたがふものなり。此故に所思のまゝを為にいでじがために、つねに神道によりてその源たる偏心を制すべきなり⁽⁴⁶⁾。

偏心を制御するのが神道である。ここでいう「神道」の「神」とは、心という意味である。この神道をもってしても制御しきれなくなると、一向心となる。その一向心をそのまま行為に出すと時宜を破って破滅してしまう。そこで一向心は歌として詠み出すことによって、時宜を破らずにすむ。その方途となるのが歌道なのだというのが、御杖の歌学の基本思想である。

富士谷御杖の歌学についてフロイトやラカンの精神分析との共通点を指摘する研究⁽⁴⁷⁾もあるほどで、「心理学的であるより病理学的でさえある」⁽⁴⁸⁾思想と言えよう。

こうした思想形成の背景には、多分に御杖の複雑に屈折した思考があ

ると思われる。御杖は言う。聖人という境地の人であっても、なお歌を詠むものである。ものの道理のうえでは、皆、健気に気強く、毅然としているとは思っていても、知らず知らずのうちに、あることに執着してしまふような心がある。そのような心をまったくもたない人間は存在しないだろう。⁽⁴⁹⁾ 執着心は誰でも持っているという、御杖の粘着的な人間観が垣間見られる。

以上、富士谷御杖の思想の傾向を考察してきた。しかし、国語教育への理論移入において、こうした思想的背景はきれいさっぱり捨象されてしまう。そうした移入の態度に対して、藤田洋治は次の通り強く批判する。

この御杖に魅了された垣内は、この長所も短所も無批判に導入したのだろうか。垣内はその方法を止揚して、自らの解釈理論に結びつけていったのである。御杖の発想の独創点だけを活用し、その内包する問題点については指摘さえもしてはいないが、あるいはその理論だけにしか触れられないまま、御杖の具体的な注釈を読むことが出来ないまま、御杖の理論だけを活用したのではなからうか。⁽⁵⁰⁾

藤田の批判のうち「御杖の具体的な注釈を読むことが出来ないまま」という指摘については、反証することができる。垣内松三が一九三八(昭和十三)年に著した『形象論序説』の中で、「先づ一例として富士谷御杖が高市連黒人の『何所にか船はてすらむ安礼乃崎榜たみゆきし棚無小舟』の解釈を見る。……」と述べたうえで、それ以下で、古今書院版『万葉集燈』および同書収録の島木赤彦著「万葉集燈解説」を引用している⁽⁵¹⁾のである。よって、垣内松三が古今書院版『万葉集燈』を読んでいたことは確かなのである。

しかし、それをもって藤田洋治説をまったく否定することはできない。つまり、垣内松三は富士谷御杖の倒語説に魅了され、結果として、それを換喩というレトリック技法のレベルで導入した。しかし、藤田洋治のような富士谷御杖研究者から見ると、富士谷学説を換喩骨胎して国語教

育の世界に移植したという批判・不満が生じるのは無理なからぬことと言える。

垣内松三の学問的性向については、次の引用文が適確に指摘している。

垣内松三は、当時最新の欧米の文芸理論、言語理論、哲学、美学、心理学、教育学等文化科学の諸潮流を正視し、それらと対決し、日本人の日本学者、日本文化研究者としてそれらをのりこえようと努力した学者であった。その努力の軌跡は、『国語の力』全体を通して明確にみいだすことができる。(中略)『国語の力』の中の随所に、自己自身の文化科学的構想の中へ関係するあらゆるものを溶かし込んでいく溶鉱炉のエネルギーを感得することができる。その溶鉱炉は、昭和に入って「国語教育科学」というデザインをもったものに形成されていた⁽⁹⁾

垣内松三は、世の古今東西の様々な学問的成果を次から次へと自らの学説の中に溶かし込んでいく。その量たるや膨大である。そして多様な文化科学的成果を溶かし込んだ結果として、「形象理論」や「国語教育科学」といった、独自の比類なき理論を鑄造していった。

ただ、その行為が、先行科学の研究者の目から見ると、表面的な良いところ取りと映るのかもしれない。こうした批判は、後発の学問・学際的な学問に特有の問題点を指し示しているものなのであろう。

【注】

- (1) 倉澤栄吉 (二〇〇六) 「『言語生活の向上』に向けて」(『月刊国語教育』26巻6号、東京法令、一三頁)
- (2) 高橋和夫 (一九六一) 「垣内松三論」(『教育』125号、国土社、三九頁)
- (3) 牛山恵 (二〇〇四) 「読みの指導理論」(『国語教育指導用語辞典 第三版』教育出版、二二四頁)
- (4) 清水清吉 (一九三六) 『読方教育に於ける新復古主義の提唱』一頁
- (5) 注4に同じ。三頁
- (6) 注4に同じ。三一四頁
- (7) 注4に同じ。四頁
- (8) 注4に同じ。四頁
- (9) 注4に同じ。四頁
- (10) 注4に同じ。四頁
- (11) 垣内松三 (一九四七) 『国語の力(再稿)』——真実・信実・誠実の恢復のために——牧書房、三頁
- (12) 垣内松三 (一九二二) 『国語の力』不老閣書房、八二頁
- (13) 注12に同じ。一一六頁
- (14) 注12に同じ。一二三頁
- (15) 垣内松三 (一九二七) 「第二次国語教育研究の展望」(『国文教育』5巻10号、不老閣書房、二頁)
- (16) 注15に同じ。五頁
- (17) 輿水実 (一九八四) 『読解指導の基礎・基本』明治図書、四二頁
- (18) 輿水実 (一九七〇) 『国語科基本用語辞典』明治図書、三七頁
- (19) 垣内松三 (一九二八) 「形象の概念」(『国文教育』6巻6号、不老閣書房、一一頁)
- (20) 注19に同じ。一一二頁
- (21) 注19に同じ。一二一三頁
- (22) 注19に同じ。一四頁
- (23) 垣内松三 (一九四〇) 『言語形象性を語る——自叙伝風に——』国語文化研究所、八四頁
- (24) 注23に同じ。八四頁
- (25) 注23に同じ。一六九頁
- (26) 注23に同じ。一八〇頁
- (27) 鈴木暎一 (一九九一) 「富士谷御杖」(『国史大辞典 第十二巻』吉川弘文館、一四八頁)
- (28) 富士谷御杖 (一八一七) 「歌道挙要」(三宅清編 (一九八六) 『新編富士谷

- 御杖全集 第四卷』思文閣出版、七六六頁（適宜句読点を加筆、以下の引用文も同様）
- (29) 注28に同じ。七六八頁
- (30) 中村雄二郎（一九七二）『制度と情念と』中央公論社、一八三頁
- (31) 坂部恵（一九七六）『仮面の解釈学』東京大学出版会、二三一頁
佐藤深雪（二〇〇一）「富士谷御杖の言語論—国学における声と文字—」（白井隆一郎・高村忠明編『シリーズ言語態4 記憶と記録』東京大学出版会、一三二頁）
- (32) 注28に同じ。七六八頁
- (33) 注31の佐藤深雪に同じ。一三二頁
- (34) 野内良三（二〇〇五）『日本語修辭辞典』図書刊行会、一〇八頁
- (35) 『芥川龍之介全集 第一卷』岩波書店（一九九五）、一四五頁
- (36) 諸坂成利（二〇〇四）『虎の書跡—中島敦とボルヘス、あるいは換喩文学論—』水声社
- (37) 注36に同じ。帯に書かれたフレーズ。
- (38) 富士谷御杖（一八二二）『万葉集燈』（三宅清編（一九七九）『新編全集 第二卷』思文閣出版、三〇六—三〇七頁）を意訳。
- (39) 島木赤彦（一九二二）『万葉集燈解説』（『万葉集叢書第一輯 万葉集燈』古今書院、二一三頁）
- (40) 田卷素光・信清確郎（一九三一）『尋常小学国語読本研究の新資料 卷の十』大正書院、五七〇頁
- (41) 佐藤徳市（一九三二）『形象の読み方教育』厚生閣、一五七頁
- (42) 注41に同じ。一五八頁
- (43) 注23に同じ。一九五頁
- (44) ニヶ崎彬（一九八三）『花鳥の使 歌の道の詩学Ⅰ』勁草書房、二五四—二五五頁
- (45) 富士谷御杖（一八〇四）『百人一首燈』（『新編全集 第四卷』二二三五頁）を意訳。
- (46) 富士谷御杖（一八〇二頃）『真言弁』（『新編全集 第四卷』七〇七頁）
- (47) 平野仁啓（一九六五）『万葉批評史研究—近世篇—』未来社、一八一頁。注31の坂部恵に同じ。二二二頁
- (48) 國安洋（一九八三）「富士谷御杖の言霊倒語論」（東京大学美学芸術学研究室編『美学史論叢今道友信教授還暦記念』勁草出版サービスセンター、二七六頁）
- (49) 注46に同じ。七〇九頁を意訳。
- (50) 藤田洋治（一九九四）「富士谷御杖『百人一首燈』にみる『読解』の方法—近代以前の主題把握における一視点—」（高森邦明先生退官記念論文集 編集委員会編著『国語教育研究の現代的視点』東洋館出版社、三二頁）
- (51) 垣内松三（一九三八）『形象論序説』不老閣書房、三〇六—三〇七頁
- (52) 湊吉正（一九八二）「文化科学の溶鋳炉としての『国語の力』（国語教育研究所編『教育学科学国語教育No.311 国語の力』をこう読む』明治図書、六二頁）
- 【主要参考文献（注に記した文献を除く。）】
- 三宅清（一九四二）『富士谷御杖』三省堂
- 三枝博音編（一九五六）『日本哲学思想全書 第十一卷 歌論篇』平凡社
- 高木市之助他校注（一九五七）『日本古典文学大系4 万葉集一』岩波書店
- 大久保忠利（一九六九）『国語教育解釈学理論の究明』勁草書房
- 清水清吉（一九八一）『ある教員の足跡』熊谷印刷
- 桜井進他著（一九八六）『皆川淇園・大田錦城』明德出版社
- 多田淳典（一九九〇）『異色の国学者 富士谷御杖の生涯』思文閣出版
- 鈴木徳男・山本和明編（一九九六）『百人一首燈』和泉書院

※本稿は、二〇〇九（平成二二）年六月十四日に開催された第五三回立命館大学日本文学会大会における拙者の講演「読み方教育と形象理論」を基にしている。